

「集団移転は未来への贈り物」

阪神・奥尻 糧に導く

共助の現場 気仙沼市発



高台集団移転を決めた小泉地区で建築に関するワークショップを開く北海道大学教授の森傑さん(中) (宮城県気仙沼市)

と決めた。まず1993年の北海道南西沖地震による奥尻島の集団移転を学ぶことにした。昨年4月末、奥尻島へ。過去の記録を調べ、住民

に聞き取り、6月に「奥尻シート」をまとめた。と声が掛かった。移転先での住宅再建や公営住宅整備までの流れや住民感情などを網羅したシートは、建築関係者の目にとまり「小泉地区に

けた。3カ月後、地図を手に被災家屋を調べて記録していると、被災者から「片付けの一つでもせんかい」ととがめられるようになった。被災者よくな気がした。被災者なのか研究者なのか。心が揺れた。北海道に移り過疎地での研究を本格化させ、2003年には米国で多民族国家でのコミュニティー計画のノウハウを学んだ。北大に戻った04年以降は江差、赤平市などで実践を積んだ。

阪神から16年。支援に役立つ知識と思いを抱え再び被災地に立った。すべてが小泉の支援につながる。「これも運命か」。使命感にかられた。125世帯が集団移転を希望する小泉地区。高齢化が進み、過疎対策も急務だ。小泉の住民と初めての打ち合わせに臨んだ昨年6月、森は「集団移転は未来への贈り物です」と言い切った。人口減少を受け入れたうえで、将来の世代にも魅力的で安心して住めるまちをつくる。そのためには住民同士の徹底的な議論が重要だと説いた。

念頭にあったのは奥尻での前例。行政が主導し住宅再建のスピードが速かった点は良かった。だが移転後、人口は減り続けコミュニティーの結束は弱まった。シート作りを通じ「移転前の議論不足が要因」と感じていた。「小泉のいいところは？」という問い掛けで始まった集会は20回を超えた。住宅建材のサンプルを持ち込むなど、住民を飽きさせない工夫を凝らす。毎回参加する男性会社員(45)は「みんな、集会を楽しみにしている」と話す。「自分ではなく意見も言う」と森。一方で住民が「自分たちで決めた」と実感することも必要。共同作業で「小泉のおした」をつくるつもりだ。(敬称略)

文 黒滝啓介
写真 小谷裕美

高台のプレハブ小屋に笑い声が響く。津波で家屋1200棟以上が全半壊した宮城県気仙沼市の小泉地区。「家と家が近すぎるとプライバシーが保てない」「道路から家を離すと視界が開け、街並みもきれい」。集団移転先のまちで、家をどう配置するか。約40人が模型を前に議論を続けた。輪の中心にいるのは建築計画が専門の北海道大教授、森傑(もり・すける、38)。昨年6月から小泉地区の集団移転の助言役を務める。住民はみな家を失ったが、2時間の集会は重苦しさを感じさせない。「北海道にいる我々に何ができるか」。震災直後、研究室で悩んだ。直接の復旧支援は行政や他の人に任せ、研究者として過去の災害で得た教訓を集約し、活用できる形にして被災地に届けよう